

著 義 保 味 五

列 系 の 家 作 集 葉 萬

刊 堂 文 弘

五 味 保 義 著

萬葉集作家の系列

弘文堂刊行

日本出版文化協會會員番號 110534

昭和十七年九月一日初版印刷
昭和十七年九月十日發行(五〇〇〇部)
文協登記番號ア一七〇五六六

定價金五十錢

著者

五味

保義

東京瀧野川田端

發行者

八坂

淺太郎

東京神田駿河臺
京都田中西浦町

印刷者

松

村保

東京神田西神田

配給元

東京神田談
路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所

東京神田駿河臺
電話神田二七五二
一〇八三

弘文堂書房

(落丁亂丁等有之候節は早速御取換 申上候)

(東京5993) 松村印刷・帝國製本

序

本書は「萬葉集作家の系列」と題してあるが、主として柿本人麿を中心として作風の生起する相を描かうとしたものである。萬葉集の作風は決して單一なものでないから、本書にあげた作家によつて盡されてゐないことは云ふまでもないが、その主流と考へられる作風には凡そ觸れ得たつもりである。

人麿を中心としたので、人麿の作品は諸所にあらはれ、その代りに作品數の少ない優秀作家のそれが擧げられなかつたり、擧げてあまり重要な位地に取扱はれなかつたりした憾みは免れないが、萬葉集四百五十年の長きにわたる作品を一系列に置いて見ようとした試みであるから、これは止むを得ない事情であると思ふ。従つて本書は或見方からすれば人麿研究であると云はれよう。

萬葉集の作家研究が個々の作家を獨立に對象とする場合、その個々の作家の特色をあげようとするに急であり、その作家の萬葉集中に於ける有機的位地を示すことを忘れ勝であると思ふのであるが、本書はその點各作家の間の交渉影響に少しく心を致し、作家の生長

の相にも考慮を加へてみたのである。この事はしかし概論で片づくものでなく、常に一首一首の把握から出發してゐなければならぬのであるから、なかなかの難事業で、今の私では力の及ばぬ點が多々あつたと思ふ。またかういふ考へ方の陥りやすい缺點として、歌史的な觀點をつよく持つるため、製作時代の新古によつてその作品や、ひいては作家の値打を早急に限定してしまふ恐れがあるが、そこも注意して萬葉集の歌の歴史ではあるが、各作家が示した姿は夫々歪められない相のまま把握することにとめ、その清明相の間に系列を樹てようとしたのであるが、之も力不足の感じをまぬかれない。

従つて所謂作家論的な面もあり、作品批評もあり、歌史的な敘述もあり、解釋もあり、結局この本書の分量では收り切らぬものを無理やりに取扱つたといふ形で、甚だよみにくいものになつてしまつた。その上諸先進の所説論究もかへりみることをせず、著者自身の舊説すら再び考慮することも捨てて、土屋文明先生著萬葉集年表一冊を手許に、ただ著者現在の身心をもつて一氣に記述したものであるから、世の識者に呈するにあたつて甚だ氣が氣でないものを感じるのであるが、これを機縁に著者は萬葉集に對する「私」すべてを暴露して、今後この方嚮に於ける勉強の手がかりを得たいといふ念願に外ならないのであるから、どうか大方の御指導を冀ふ次第である。

本書の校正には相澤正君、原稿清書には清水徳治君、須藤秀男君の助力を得た。記して感謝の意を表する。又弘文堂書房には執筆契約後數年を放置した著者なるにも拘らず、出版難の時局に發刊を實行して下された。忝く御禮申上げる。

昭和十七年六月

著者

萬葉集作家の系列 目 次

一 萬葉集の生誕……………	一
二 人麿と人麿前……………	二四
三 憶良・旅人の位地……………	五一
四 赤人と人麿……………	七五
五 赤人と人麿時代……………	九七
六 家持とその先進……………	一二八

一 萬葉集の生誕

普通萬葉集初期といはれる人麿前の一時期は、舒明天皇の御製(二)より始ると思つてよいが、萬葉集には所謂記紀時代にあたる年代の作品が若干存在する。所が萬葉集に收録されてあるそれらのものは、記紀にみえる作品と作風がかなり違つてゐるのである。それも同一作者でありながら違つてゐるといふ事實が多いのである。ただ萬葉集最古の作者で在らせられる磐姫皇后の御歌の

君が行日長くなりぬ山尋ね迎へか行かむ待ちにか待たむ(八五)

は、古事記に輕大郎女の一君が行日長くなりぬ山たづの迎へを行かむ待つには待たじ」

(九〇)と類歌であり、集編者もこの歌をあげて特に註記してゐるし、又輕太子の

隱國の 泊瀬の河の 上つ瀬に い杭を打ち 下つ瀬に 眞杭を打ち い杭には鏡

を懸け 眞杭には 眞玉を懸け 眞珠なす 我が念ふ妹も 鏡なす 我が念ふ妹も

ありと 言はばこそ 國にも 家にも行かめ 誰が故か行かむ(三二六三)

は、古事記の中に類想歌があり、ただ後半が「眞玉なす 吾が思ふ妹 眞玉なす 吾が思ふ妻 在りといはばこそよ 家にも行かめ 國をも思はめ」といささかの句の違ひのまま

に存在してゐるのである。これらを除いては、記紀と萬葉集の歌の間に作歌態度の著しい差があるやうに思はれる。

天皇御製歌

籠もよ み籠持ち 掘串もよ み掘串持ち この丘に 葉摘ます兒 家聞かな 名告らさね そらみつ やまとの國は おしなべて 吾こそ居れ 敷きなべて 吾こそ坐せ 我こそは告らめ 家をも名をも (一一)

右は卷頭第一の雄略天皇御製であるが、天皇御製はこの外に一首(一六六四)があるだけで(それも或本の説によると舒明天皇御製となる)、記紀に載せられた御製の方が多い。

日下部の 此方の山と たたみども 平群の山の こちごちの 山の峽に 立ち榮ゆる 葉廣熊白檮 本には いくみ竹生ひ 末べは たしみ竹生ひ いくみ竹 いくみは寐す たしみ竹 慥にはる寐す 後も組み寐む その思妻 あはれ (記)

はその一で、日下の直越の道から河内に幸行でました皇后を戀ひ偲び給うた御製である。萬葉集の方の御製(一)も、たとへば次にいふ舒明天皇の「大和には 群山あれど」の御製等に比較する時は、どこか古體であり、岡の上に若菜を摘むをとめに、名を云へ、吾こそはこの大和の國の主であるぞと呼び掛けられた、劇的な説話風な感じが濃くて、萬葉集より前の風格があるやうにも思はれるのであるが、今この記の「日下部」の御製に比すると、

歌謡性が少くなり、素材も事象をそのままに取つて、簡潔に心理の中核へ迫り、直接ものを云はれようとした所が多分にあると思ふ。「日下部」の御製のやうな詠風は記紀歌謡の定跡とする所で、「思妻あはれ」といつて心の中になく思ふ妻を、今更の如く戀ふる心を述べられるのに、平群の山の熊白檮から、その下に生ふる竹を云ひ、更にそれから「いくみは寐す」「慥にはる寐す」の詠嘆に及んでゆく構成は、謡ふ要求を多く容れ、輪廓が角角しくないやうに出来てゐる。勿論「立ち榮ゆる葉廣熊白檮」でも「いくみ竹生ひ」「たしみ竹生ひ」でも、虚假な文飾ではなくて、古代人のあからさまな心情から敏感にとらへた實體であるけれども、萬葉集の「籠もよ　み籠もち　掘串もよ　み掘串持ち」といひ、そのをとめの所持の品から、止みがたい愛憐の情をのべた直接性とは違つた類のものである。一體この萬葉集の御製には、物語の背景を有する記紀の歌謡の肉附を削り、語のひびきにするどくなつてゐる。第一に重く厚く深く意をこもらせながら、續いてゆく句々の聯りは、古風であつて、而も具體感がある。「籠もよ　み籠もち」の三四音から「掘串もよ　み掘串もち」の五六音に移行し、「この岡に　菜摘ます兒」と重厚に對象の人物を點出して、「家聞かな　名告らさね」と親愛の情の溢れる語氣で述べられる。「キカナ」で明るくひらき、「ノラサネ」でやはらかくおちつく。次に「そらみつ　大和の國は」と告げ給ふ御語氣は、いかにも帝王の御氣魄であり、「そらみつ」の如き枕詞にすら生氣が感ぜられる。「おしなべ

て」「敷きなべて」の意は正しく力づよく、「吾こそ居れ」「吾こそ坐せ」は一はいさぎよく、一は大らかに御自らの位地を明示せられた、高格無比な對句である。「本には　いくみ竹生ひ　末べは　たしみ竹生ひ」云々の輕快な對句よりも、心の内の方へ向ふ云ひ方である。「我こそは告らめ　家をも名をも」はこの一首の結びとして、親愛と訴へとのこもつた微妙な句である。天皇には外に「をとめのい隠る岡を金鉏も五百箇もがも鉏き撥ぬるもの」(記)の御製もあり、古事記に於ける御作風は、心氣のひびきといふよりは、御心情がさながらに流動して外に向つて、ひろく訴へるといつた風な所を拜するのである。而もこの風は天皇に限らず、あらゆる記紀作風の根基を成してゐるのであつて、そこに表現面のあきらかな差異がある。

萬葉集の收録者は、何故に天皇の「金鉏も五百箇もがも」といふ素材的に興の多いものを措いて、「籠もよ　み籠もち」といふ地味な、そして心のこもつたものの方を採つて來たか。記の方はすでに一の説話中に織り込まれてゐて、手をつけることを得なかつたのである。この集の方は説話からはなれて、ただそのまま傳誦されたものであつたから收録したのか。つまり偶然性が評價しての上かといふことである。所で萬葉集は前述磐姫、輕太子御二方の場合、又卷十三の作品の若干のみ記紀と交錯した作風で、他のほとんど大部分はそれと違つた新らしい表現面をもつことから考へると、決して偶然のものだとは思へない

のである。つまり作品の傳來に二つの流れがあり、又二つの違つた觀點から收録されていつたものと考へられる。傳來に關係した上代人の清明な心を信じた上、この消息を考慮すれば、どちらの相も眞であつたといふことが出来る。

この雄略天皇に國讚めの御製(紀)があり、それと同じく國讚めの歌萬葉集第二の舒明天皇の御製とを比較することによつて、萬葉集の新風の生起を明らかにし得るとおもふ。

天皇登香具山望國之時御製歌

大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 國見をすれば 國原
は 煙立ち立つ 海原は 鷗立ち立つ うまし國ぞ あきつ島 大和の國は(二)

この御製は「籠もよ」の御製よりも又一層事象に直面して、表現力を作者個人の心の響として活用したものであつて、鮮明な印象が生々躍動してゐることは、次の雄略御製

隱國の 泊瀬の山は 出で立ちの 宜しき山 走り出の 宜しき山の 隱國の泊瀬
の山は あやにうら麗し あやにうら麗し(紀)

に比してあきらかである。この紀の作には「天皇、泊瀬の山野に遊び給ひ、山野の體勢を觀給ひて、慨然として感を興して」云々といふ事柄の説明があり、それがこの歌謡の背景となつてゐる。所が舒明御製は簡潔な題詞一つですぐに作品そのものが示される。つまり説話の中の一役でなくて、獨立した作品であるといふことである。これは萬葉集の作品に

通じて存する基本精神である。

「大和には」の御製は、平明と云つて足らず、順直と云つて足らず、句々の連續に何の澁滯する所もないのに、力が充滿して、天地一杯の明朗健康な氣分がみなぎつてゐる。作者の御氣持は、第一句から結句にいたるまで透徹して、他の大小の感情の陰翳をまとはず、唯第一人の御身心そのままに、大和國原を見放けやり給ふ心ぐみである。「大和には、群山あれど　とりよろふ　天の香具山」の大柄な息と語句のうるほひと、「登り立ち　國見をすれば」の實體的にして而もゆるやかな深みと、「國原は」「海原は」のはなやかな詠嘆と、「うまし國ぞ」の充足したまへる御氣持の、恣にして品格のある表現と、これは一氣にのみ奉つて何の奇もなきにおどろくと共に、「大和の國は」といふ第一句の繰返しのごとき結句に、不可思議なる餘韻の漂ふことを再び驚くものである。後進の赤人が「田子の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ不盡の高嶺に雪は降りける」(三一八)と詠み、その順直高朗を後世にまで讀へられてゐるが、さてこの御製の「登り立ち　國見をすれば」の正直な聲調に比するときは、なほ歌人的意識を内に働かした苦澁の影が、かすかに残つてゐることを感ずる。更に又仁德天皇御製

おしてるや　難波の埼よ　出で立ちて　我が國見れば　淡島あはしま　淤能碁呂島おのごろじま　檳榔あじまきの

島も見ゆ　佐氣都島見ゆさきつしまみゆ　(記)

はむしろ赤人の作と其の態度が似てゐながら、赤人作よりもその聲調に歌謡性の多い點に於て、又その背景は磐姫皇后の御ねたみによつて、黒日賣が本國に下るを追ひたまふ折のものといふごとき説話の存在により、舒明御製とはすでにその生誕を異にして居ることを知るのである。又「うまし國ぞ あきつ島 大和の國は」にしても、雄略御製の「出で立ちの宜しき山 走り出の宜しき山」「あやにうら麗し」の如き歌謡性を拂拭しをはつて居り、又日本武尊の「倭は國のまほらま たたなづく 青垣山ごもれる 倭しうるはし」(記)の流麗な詠嘆よりも、現世人としての明瞭な眼をもつて、對象を把握し、その感情の波動がおほどかに強くひびき出てゐるのである。かくの如き相違はいかにして生れたか。それはしばらく措くとして、この御製(二)が萬葉集の出發であることが、現在定評となりつつあるのは、甚だもつともなことで云はねばならない。

次に萬葉集卷頭第三、中皇命の御歌を考へてみる。

天皇遊獵内野之時中皇命使間人連老獻歌

やすみしし わが大君の 朝には とり撫で給ひ 夕には い倚り立たしし 御執
らしの 梓の弓の 中弭の 音すなり 朝獵に 今立たすらし 夕獵に 今立たす
らし 御執らしの 梓の弓の 中弭の音すなり (三)

反歌

たまきはる宇智の大野に馬並めて朝踏ますらむその草深野（四）

題詞に天皇とあるは舒明天皇、作者中皇命は今の所不明と申すより外ないが、皇后か皇女かいづれかであると思はれ、大君の朝獵に出立たせられる状を述べ、その出立にあたつて弓をとり鳴らす響に心をよせられたのであり、反歌ではその御一行のいでます草深き野を思ふといふ御歌である。長歌は全體が音樂的な節奏を生命とし、意味構成は「梓の弓の中弭の音すなり」といふ、きはめて簡單な事實が中心である。「朝には　とり撫でたまひ夕には　い倚り立たしし」の對句を前奏とし、「朝獵に　今立たすらし　夕獵に　今立たすらし」がその後奏となり、整正相響の工合はきはめて率直簡潔、第一の「中弭の音すなり」に比して、結句の同じ句が感情の昂揚の度を濃くしてゐる工合は、作者の心音に接する思ひがある。句々流通の相を以て連續し、音感も意義感も清潔をきはめてゐる。對句の中に入入れられたとはいへ、「とり撫でたまひ」「い倚り立たしし」が、大君の御弓に對する作者のねんごろな感情を暗示し、「中弭の音すなり」は大君と大君をめぐるいさぎよい出立に心が集中した心理を暗示して居る。早曉の宮殿の中にひとりしづかに弓弭のさわぎを耳にされる、この清純一途の感情は、何ともいへぬ奥行がある。「御執らしの」も音感がやはらかで、「とり撫でたまひ」と同じ溫みのある句であるし、「今立たすらし」の重用も煩

はしくなく、その「今」なども心の細かな働きから出てゐる上に、敏感な句であるといふべきであらう。吟味すれば同じ心持を屢々重ねて云つて居るのであるが、それが煩瑣にならないで、或る古風な聲調の中に湛然と情緒をたたへた所は、脆弱といふことから、縁のない古歌の特徴を示してゐる。所で古事記には、これとよく似た袁杼比賣の作がある。

やすみしし 吾が大君の 朝戸には い寄り立たし 夕戸には い寄り立たす 脇
几が下の 板にもが吾兄を

これは豊樂の日、袁杼比賣が大御酒を獻つた時、雄略天皇が「水そそぐ 臣のをとめ 秀罇取り 堅く取らせ 下堅く彌堅く取らせ 秀罇取らす子」(記)とよませたまうたのに對しての和歌である。袁杼比賣の歌は御製と同じく記紀の歌の一般構成で、内容は個性的なもの少なく、その場の情景に適ふやう、對者の心持も汲みとるやうによんでゐる。一首の調べが謡ひやすく出来てゐるだけでなく、作歌のそもその出發が、中皇命の御歌のやうに、すぐそこの、ただ今の情景をとつて、感情を直敘するといふ趣でない、一般的な所がある。同じく「やすみしし わが大君」「い寄り立す」といひ、同じやうに「朝戸には」「夕戸には」の對句を用ひてゐても、「中弭の音すなり」式に現實描寫がない。「脇凡の下板にもが」といふのは萬葉集にも「吾背子は玉にもがもや」とよんだ例があるが、製作の年代が古いにも拘らず、とらへ方が一般向になつてゐる。袁杼比賣の歌が丁度同じやうな

句を用ひて居るので比較してみたのであるが、舒明天皇御製の場合と同じく、中皇命の御歌には眼の覺めるやうな新鮮さが感じられるのである。記紀歌謡の製作心理には多分にその歌の背景である事件的説明と對者への理解の要求——この對者は個人といふより多數者である場合が多い——のために、句の繰返しも對句の構成も形式的になつて、そこには作者の感情移行や上昇や沈潛の經路が、生きいきと語氣に現れるといふことがない。萬葉集の長歌、ことに人麿前のものには、表現の目處めどがあつて、心理的にも詞句の上からも、一の限定がある故に、句々が緊縮して來、従つて繰返しにも對句にも、作者の情緒が乗つて來てゐる。だから作の中途の句と終りに近い句とたとへ意味が同じでも、終の方が何等かの波瀾を持ち重量を持つ。この工合が強く直く表現されたものの一が、中皇命の御歌で、記紀とは別な作風となつていつた所以であり、やがて人麿などが十二分にそれを活用して、所謂萬葉調の確立をみたものと思はれる。

反歌は記紀の方に比すべき短歌を見ない。それ程、獨特であり、地歩が確立してゐる。長歌よりも更に氣魄といふべきものが迫つて來る。かういふ作品になると、隙がないとか調べが高いとかの形容をふみ超えて、ただ作者そのものが響となつてここに聳立する思ひがする。「馬並めて」はいかにもうまい句であるし、「朝踏ますらむ」の「朝」と「ふむ」との二品詞が熟合した工合も妙味があり、そこから「その」といひ「草深野」とつづくあた